



海老原誠治 (えびはら せいじ)

いただきます.info事務局、三信化工株式会社、資源と環境と教育を考える会『エコが見える学校』、女子栄養大学短期大学部非常勤講師、元関東学院大学非常勤講師。和食器を用いた出前授業や、テレビ局の撮影クルーの経験を生かして動画作成の研修会の講師も務める。

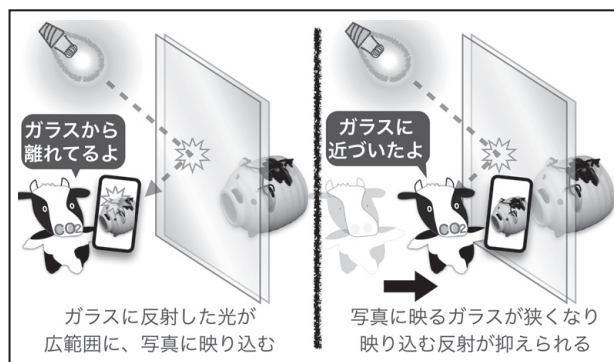
ガラス越しの撮影／表現力を子どもに

▶ ガラス越しの撮影法

夏休み、子どもたちは博物館や水族館、お祭り・イベントなどで、食育に触れるさまざまな機会があったかと思います。最近、人類の財産である文化に対し、共有が基本である「パブリックドメイン」の考えも浸透しています。さまざまな施設で、撮影OK、公開OK、商用利用OKが増えました。訪れた際には可否に関し、ぜひ確認してみてください。ただし、文化財等を生み出した功労者にその労力が還元されるのは当然なので、著作権の保護期間など一定期間を過ぎたのちにパブリックドメインとなるのが基本です。またフラッシュ撮影は、文化財保護の視点でNGです。

ガラス越しの撮影のポイントは、極力ガラスにレンズを近づけて撮影します(図)。

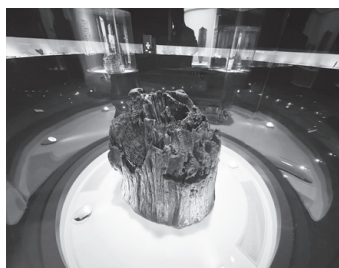
図 ガラス越しの撮影(左:離れた場合 右:近づいた場合)



ガラスの表面反射を減らし、また、ガラスに汚れが付いていても、レンズの性質でピントが合う範囲外のため、ボケて目立たなくなります。

▶ ICTで食育を行う理由

ICTの一環として、動画作成を中心に連載してきましたが、少し振り返って考えたいと思います。どうして、わざわざ食育でICTを活用するのでしょうか? 確かにICTでしかできないこともあります。必ずしも必須でないことがあります。むしろICTで行うことにより、学びの可能性を閉ざす側面もあります。例えば動画は、興味を引く場合もありますが、ただただで知っ



◀三内丸山遺跡・縄文時遊館、撮影や発信可の縄文時代の柱。上…ガラスと距離を置いてスマホで撮影。ガラスに反射した他の展示照明が映る。下…ガラスにスマホを近づけ撮影。奥のガラスには反射が映るが、手前には反射がなく、撮影できた。

表 食育を通じたICTの目的と、期待できる表現力・創造力

	目的 (アウトカム)	表現・創造 主体	指導者の手段・支援等(アウトプット) ●期待できる表現力・創造力の事例
A	(単方向的) ICTコンテンツを通じた、食育	教職員	食、食料生産、調理、食文化などへの興味を醸成する手段 ●校内放送（中継または編集動画） ● SNSへのレシピ動画投稿
B	(双方向的) ICTコンテンツを通じた、食育	教職員	受動性を持つICTにより、調べ学習や探究など、子どもが主体的に関われる食育指導 ●クイズ・パズル・間違い探しの配信 ● 探索型の動画、VR画像・動画（早送りなど、見たい箇所を選べる）配信 ● 3Dデータの配信
C	ICTによる子どもの表現力・創造力の向上（1）	子ども	ICTを使い表現したい、食育対象（記録対象・被写体）の提供 ● 食材・調理器具など、被写体の貸与や提供
D	ICTによる子どもの表現力・創造力の向上（2）	子ども	ICTを使い表現するための記録環境の整備・記録方法の指導 ● 知的財産、著作権の指導 ● プレゼンテーションアプリ、画像を活用したレシピ作成、調理の宿題 ● 写真撮影、動画撮影、音声収録、インタビュー収録などの指導 ● 撮影用機材【照明機材（反射板等）、マイク等】の貸与や撮影環境の整備
E	ICTによる子どもの表現力・創造力の向上（3）	子ども	ICTを使い、自身で記録できない物・事を対象にした表現の支援 ● 食材や、生産過程・調理過程の様子を記録した、素材の提供 ● 食に関わる生産者のインタビューなどを記録した、素材の提供 ● その他、コンテンツ素材となるデータ提供 ● 信頼でき、有効な、素材データベースなどの紹介
F	ICTによる子どもの表現力・創造力の向上（4）	子ども	記録・観察対象を、自分自身なりの視点の本質を模索するための支援・環境整備 ● 撮影用機材【接写レンズ、ファイバースコープ】の貸与や撮影環境の整備 ● スローモーション（高速度撮影）等、スマホの応用的な撮影操作の指導

たつもりになったり、動画の内容のみを事実と思い込むような場合があります。

それであっても、やはりICTを活用した食育は必要だと考えます。それは食育自体のため「だけ」ではなく、食育を切り口に、食育以外に横断した子どもの表現力や創造力につながると信じるからです。調理を通じ段取りや作業工程を学び、食事を通じマナーや社会性を知り、喫食を通じ感謝や思いやりを感じるのと同じです。

きっかけは食育でも、子どもたちがICTの技術に触れれば、食育以外にも活用する機会が生まれます。実際、筆者が行う食育では、スマホ用のクリップタイプの接写レンズを使いますが、「100円ショップにあるよ」と伝え、「自分でも買って活用したい」という子どもの声が聞かれます。

このような視点で、食育におけるICT活用の目的（アウトカム）を考えると、たくさんの可能性が見えます。筆者なりに表にしました。この中でC～Fの実践は、これ

までも連載で紹介してきた事例です。子ども自身がICTを活用する場面において、指導者がICTが苦手でも支援できる方法を示していて、筆者がもっとも期待を感じる項目でもあります。

ICT推進は一旦は落ち着いてきたようですが、この機会に何を目的にICTを活用するのか等を整理し、検討するのはいかがでしょうか。中央教育審議会の諮問でも、新たな課題に対し以下、検討されています。

「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」（令和6年12月25日）で挙げる課題（抜粋）：実体験の格差／デジタル化の負の側面等が顕在化する中、社会の分断の芽を指摘／「デジタルの力でリアルな学びを支える」との基本的な考えに立ち（概要より）／デジタル競争力は国際比較でも低位（諮問のポイント：詳細版より）／高等教育段階でデジタル・理数分野への学部転換等の取組が進む中での、初等中等教育段階における文理横断・文理融合の観点からの改善の在り方（概要より）／生成AI等に関わる情報モラルやメディアリテラシーの育成強化（概要より）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/mext_00003.html